

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第8号 果樹

発行日 平成20年10月30日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

「いわてアグリベンチャーネット」はリニューアルしました！
新しいアドレスは「<http://i-agri.net>」(8月以前の記事は <http://www.nougyou.kitakami.iwate.jp/agri/>)

- ◆ふじの着色管理徹底で品質アップ！！
- ◆晩生種の適期収穫で特性発揮！！

りんご

1 生育の状況

(1) 果実肥大

りんごの果実肥大は、10/21現在の定点調査から見ると、全般に平年並からやや大きくなっています(表1)。また、8月下旬以降のまとまった降雨と果実肥大が旺盛となったことに起因すると思われる「ふじ」の裂果(つる割れ)が県内全般に見られています。

表1 定点調査におけるわい化ふじの果実肥大
(調査日 10/21, 果実横径: 単位 mm)

地域名	ふじ				
	20年	19年	平年	前年比(%)	平年比(%)
二戸市	90.4	91.5	90.0	99	100
岩手町	93.6	90.3	87.9	104	106
盛岡市	91.5	87.4	88.2	105	104
紫波町	90.9	85.6	90.3	106	101
花巻市	94.5	91.1	86.1	104	110
農研センター	92.6	91.5	89.1	101	104
北上市	94.1	90.7	91.8	104	103
奥州市前沢区	91.2	90.6	91.1	101	100
奥州市江刺区	88.9	84.8	87.1	105	102
一関市花泉町	86.5	84.3	87.1	103	99
一関市大東町	88.5	79.6	88.3	111	100
陸前高田市	87.6	87.5	88.4	100	99
宮古市	93.1	92.1	89.7	101	104
岩泉町	97.1	97.0	89.4	100	109
洋野町大野	88.6	88.4	87.7	100	101
県平均(参考)	91.3	88.8	88.8	103	103

(2) 果実内容

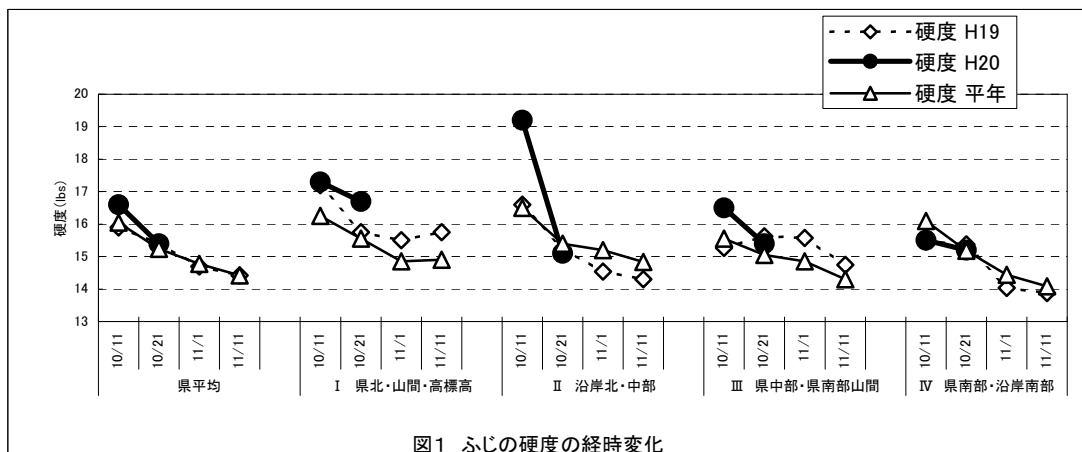


図1 ふじの硬度の経時変化

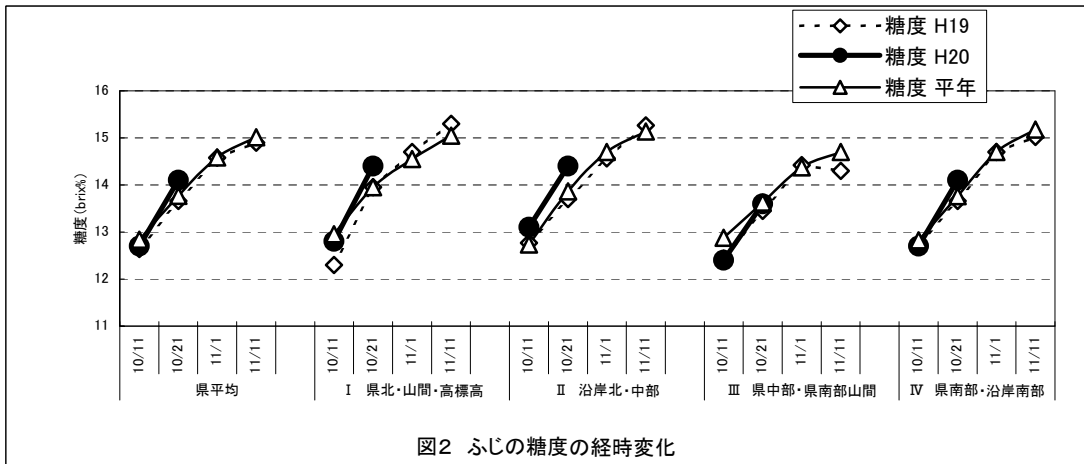


図2 ふじの糖度の経時変化

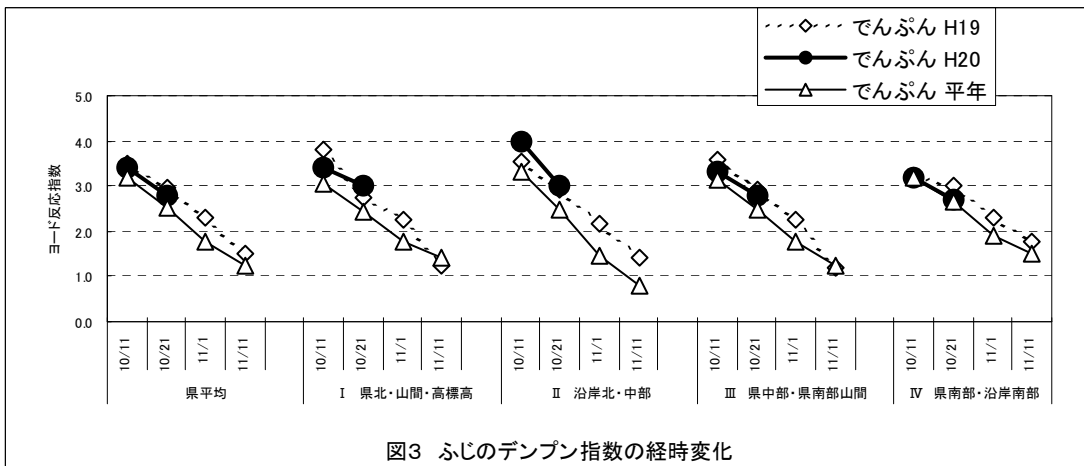


図3 ふじのデンプン指数の経時変化

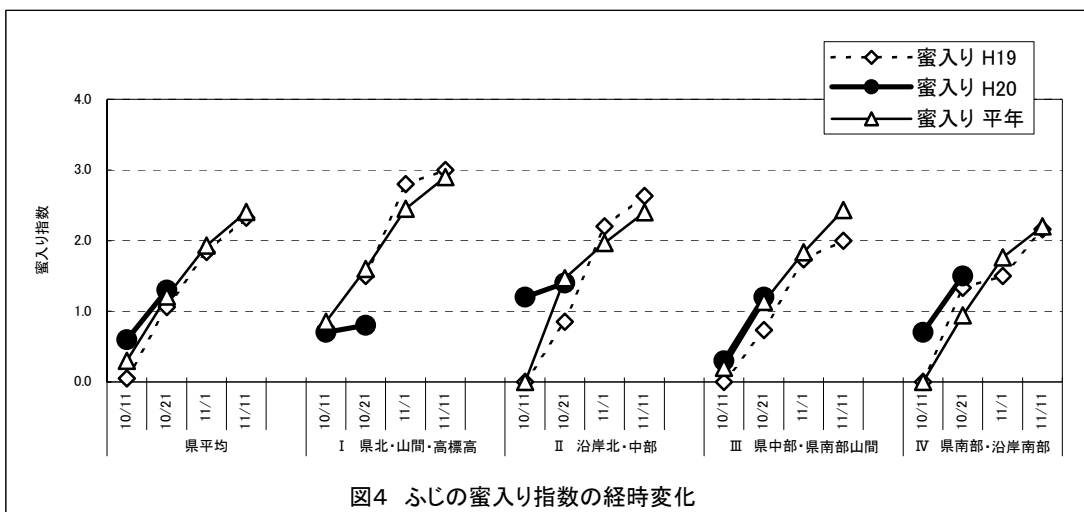


図4 ふじの蜜入り指数の経時変化

「ふじ」の果実内容は、糖度が平年よりやや高い他は、硬度、デンプンの抜けなどほぼ平年並となっています（図1～4）。地域によっては、みつ入りにやや遅れが見られますが、みつ入りを待って収穫が遅くなると、裂果した果実は果肉が軟化しやすいですし、低温による樹上凍結や内部褐変が起こる危険がありますので、適期収穫を心がけましょう。

2 管理作業

(1) 晩生種の収穫

「ふじ」などの晩生種については、充分味をのせてから収穫したいものです。しかし、みつ入りを意識し過ぎて遅くまでならせると、果肉の軟化や果実の樹上凍結の危険が出てきますので、適期収穫に心がけます。また、養分の消耗が、樹体の凍寒害につながる恐れもありますので、注意してください。

もしも、果実が樹上凍結した場合には、気温が上がる日中に果実が解凍するのを待って収穫してください。一度凍結した果実は貯蔵性が劣りますので、早めに販売するようにします。

(2) 野積みする際の注意

晩生種については、収穫した果実を野積みすることがありますが、野積みは建物の北側や樹園地の風通しの良い冷涼な場所に、コンテナが直接地面に付かないようたる木等を台にして積み上げ、雨に濡れないよう覆いをかけます。野積みは、果実凍結が生じる気温になる前にやめ、冷蔵庫等に入れるようにします。

表2 りんご中・晩生種の収穫期の目安

品 種	満開日起算日数	硬度(ポンド)	糖度 (%)
王 林	160～170	14以上	14以上
シナノゴールド	170日以上	15以上	15以上
ふ じ	165～180	14以上	14以上

3 除草剤の秋期処理

りんご園において、「ふじ」の収穫後から落葉する前まで（落葉後は散布ムラが出るため）に除草剤を処理することで、翌年の6月上旬頃まで雑草を抑えることができます。

秋は気温が低く、除草剤の効果が出るまで時間がかかりますので、草が枯れないからといって、再度処理する必要はありません。

除草剤を秋期処理することで、春の作業を分散することができ省力的です。是非、取り組んでみてください。

表3 除草剤の秋処理における散布体系

優占草種	1回目 (11月)	2回目 (6月上、中旬)	3回目 (8月上、中旬)
強雑草	吸収移行型 (通常散布)	吸収移行型 (通常散布)	吸収移行型 (通常、少量散布)
弱雑草	吸収移行型 (通常、少量散布) または接触型	吸収移行型 (通常散布)	吸収移行型 (通常、少量散布)

注1) 強雑草：タンポポ、クローバー、ヒメオドリコソウ（除草剤の効きにくい草種）

弱雑草：ハコベ、メヒシバ（除草剤の効きやすい草種）

注2) 吸収移行型・・・薬剤が植物体内に吸収され、草体全体を殺草できるタイプの除草剤（ラウンドアップなどのグリホサート系除草剤）

接触型・・・主に薬剤が付着した部分を枯らすタイプの除草剤

※ なお、収穫後の秋期処理した除草剤は、翌年の農薬使用回数に含まれますので注意してください。除草剤の種類によって、風などで舞い上がり、樹体に付着すると薬害を生じるものもありますので、専用の散布器具を用いて、飛散しないよう注意しましょう。

4 樹体の凍寒害防止

りんごなどの落葉果樹は、落葉後、一定の期間低温に遭遇し、休眠する必要がありますが、気温が高い状態で推移すると、休眠が浅くなり耐凍性が低くなる場合があります。特に、定植年～結実初期（3～4年生）の若木が、影響を受けやすい傾向にあります。また、結実量が多く衰弱した樹や水はけの悪い圃場、肥料が遅くまで効いて新梢の止まりの悪い樹では、樹齢が進んでも被害が出ることがあります。

近年、冬季の気温が高めで経過することが多くなっています。凍寒害の心配のある園地では、若木を中心に地際部から高さ50cm程度まで、ホワイトンパウダーや水性ペンキ（白色）を塗布するか、わらを巻くなどして被害の軽減を図りましょう。



図5 ホワイトンパウダーを樹に塗布した状態

※ 農薬を使用する際は、必ずラベル等で使用基準（登録の有無、収穫前使用日数、散布濃度、使用回数等）を確認して使用してください。

農作物技術情報の20年度定期発行は今号で終了となります。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。※ 発行時点での最新情報に基づき作成しております。※ 発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

9月15日～11月15日は秋の農作業安全月間
「気をつけて」朝のひと声で 初心忘れず ゆとりの仕事